

「“ 死の谷間 ” と呼ばれた 「原爆症」を体験して」

長崎記念病院 顧問 福井 順



どうもご紹介有り難うございました。私、今ここに立っているわけですが、ちょうど今から10年前でございました。原爆50回忌にここで合同慰霊祭がありまして、その時に大学の方からお話があり、ここで私の経験をお話したわけでございます。それからちょうど10年で、現在とても私は生きていないはずはないと思っていたのに、こういうふうに生きています。ほんとに不思議な感じが自分ではするくらいで、現在79歳、数え年の80歳ということになっておりますので、とてもそういうときまで生きる、ほんとは21世紀にまで生きるなんてとても思っていませんでしたが、現在はこういう風な形で生きております。で、いろいろな病気もいたしました。現在もこういう格好で周りから見ると元気のように見えるんですけども、実際は自分の家に帰ると、ベッドの横に座って在宅酸素を吸うというような状況になっておりますので、まことに皆さん方に話をする途中で、申し訳ないようなことが起こりましたら、堪忍していただきたいと考えております。

私が被爆いたしましたのは、当時長崎医科大学と言っていましたけども、長崎医科大学の付属病院の南講堂でございました。爆心地より700mということでございますので、かなり近距離だったと自分では思っております。長崎に落ちました原子爆弾というのは、ファットマンというあだ名がついておりまして、プルトニウムの爆弾でございますが、TNT火薬の約2万2千トンに匹敵するという大変な代物でした。昭和25年に長崎市が発表しました時の資料によりますと、そのときのたった

1発の原子爆弾で死者が7万4千人いました。現在ロンドンで行われてます、例のテロでございますが、52人だということで、テレビで騒いでおりますけれども、実際は長崎の場合は7万4千名の方が一挙に亡くなった。その上に7万5千人の人が重軽傷を負うというような状態になったわけでございます。それから考えますと、随分ひどい目に遭ったんじゃないかなと思っております。そのときに同時にですね、放射線障害というのが高度に起こりまして、放射線のなかでも中性子と、それからガンマ線、この両方が人間の体に大変な影響を及ぼして、たくさんの方がこのために亡くなるというような死因に繋がっております。当日、病院に、そのとき大学に出ておりました出席者は私の同級生で、130名近く、129名でございましたけども、それから4人だけ生き残りました。それから現在は、東京に今在住しております江口君という方と、私と2人だけになっております。だから当時の出席者の中で言いますと、たった2人だけ残っているというようなことでございます。

あの日の一瞬にして起こりました長崎の惨状というもの、大変恐ろしい状況でございます。これを文章とか、それから話です、これ皆さん方に伝えるということは殆ど不可能だと思います。というのは、もう常識をはずれた状態でございます、説明ができません。しかし短い言葉です、的確にこれを表現した小学3年生の女子の児童の詩がございます。ポエムですね。短い詩でございますが、これは吉永小百合さんがですね、長崎の原爆詩をうたった中に朗読された中の一つで

ございまして、次のようなものでございます。「原子爆弾が落ちると、昼が夜になる。人はみな、お化けになる」と。つまり「原子爆弾が落ちると、昼が夜になり、人はみな、お化けになる」ということでございます。これは全く的確でございまして、「昼が夜になる」ということはですね、常識では殆ど考えられない状況でございまして。一瞬間に昼が夜になるわけです。「人はみな、お化けになる」ということで、そこにいるすべての人がですね、一瞬でお化けに、化け物になってしまうという全く考え難いことでございますけれども、それがそのとおり、間違いのない事実であるという非常識の世界が、展開されたわけでございます。原爆に被爆してから次々と、身の回りに常識はずれのことを起こってまいりましたけれども、常識はずれのことがないとですね、生きておられないという状況であったと思います。

全く、私が会いました当時の人達は、皆お化けでございました。もう皮がですね、反対にめくられて、そしておらさがっている状況で。顔も真っ黒でございまして、私の顔も真っ黒であったらしいんです。自分でわかりませんから。友達と会いました時に、友達が「福井君か？福井君か？」と盛んに僕に言いましたんで。私はその顔をじっと見て、真っ黒なもんですから。お化けなんですね。お化けの人は自分が知っている人はいなかったんですが、どうも東君^{アズキ}という人らしいんで、「東君ですか？」と聞いたら「そうだ」という話をなさいました。もうまさにみんなが一瞬にしてお化けだったわけです。

当時11時2分でございました。昼の真っ最中、お昼でございましたけど、それが1発の原子爆弾であの雲の下にはですね、もう夕闇。もう長崎の市街というのはあちこちから火が出ておりました、そしてもう何と言いますか、畑はですね、全部根こそぎひっくり返って赤土色になりましたし、木は全部同じ方向に倒れているわけですね。爆心地を中心にして同じ方向に倒れますから。そしてその皮が剥けてですね、枯れ木になったような状況で、全部同じ方向に倒れているという、考

えられないような状況が、そこにありました。私もびっくりいたしまして言葉も出ないというのが本当でございまして。まさに非常識の世界でございました。原爆に被爆してから次々に身の回りに非常識なことが起こりましたが、正直な話、私は早く死ぬんだとばかり思っておりました。誰でも死ぬんですけども、ましてや近距離被爆者ですから、もう早く死ぬということは間違いのない事実だと自分は思っまして、早死にするんだとばかり考えてました。当時の新聞を見ましても、非常に癌になりやすいだとか、あるいは白血病になりやすいだとか、たくさんのその病気というのが、免疫不全だとか起こってまいりました。甲状腺も腫れて、私も現在甲状腺が腫れて、声が少し悪くなってきてるわけなんですけども。反回神経（レクレーンス）の障害が起こりまして、その圧迫を受けまして、やはり声が少し出にくくなっております。3ヶ月にいっぺんぐらいは病院の外科の先生から針を入れて頂いて、そして中の液を採って頂くということで、甲状腺腫を乗り越えたり致しております。毎日甲状腺の圧迫によります機能低下というのがありますので、甲状腺製剤を飲んだりいたしてるわけでございます。

原爆が落ちましたときにはですね、実は私は大学病院の中の南講堂におったということなんですが、他の全員殆どはね、みんな基礎の教室の方に行っております。そこで全部死亡しております。なぜ私達が大学病院の中にいたかと言いますと、ちょうど内藤先生という細菌の教授がいらっしまして、用件のためにちょっと遅れて来るので、出席だけ取って帰すということですね。私がおのときにそれをそのまま情報が入らないで、まっすぐそのまま基礎に行っておりますと、死んでるということになっております。その情報が入りまして、何人かと話しあって病院に残りました。ポリクリを見学しようということになりまして、そこに出たんでございますけども、患者さんがあんまりなくてですね、結果的には11時前に南講堂に帰って来まして、みんなでそこで話をしたりなんだりしていたわけでございますけども、そこに

20数人はいたと思います。

その中で助かったのが、藤瀬という男とですね、福井という私と2人でございます。両方ともふの字が付いております。これは50音順でですね、なんと8月7日の日、前の前の日の、長崎大学のこの医学部のですね、自警団に当直にあたりまして。あいうえお順でございますので、福井と藤瀬とあたったわけでございます。その翌日ですね、ちょうど角尾学長が8月6日の夕刻に広島を通過して来られて、8月8日の日の朝に長崎に着かれました。その日は大詔奉戴日という、この頃8日の日には必ず大詔奉戴日というのがあったんでございますが、戦争が始まる時の詔（みことのり）を読まれるという状態でございます。そしてそこで私自身、広島の状態というものを聞いたんでございます。「落下傘ですね、新型爆弾が落ちる」という話を角尾学長がなされたわけですね。それを聞いてたのが、福井と藤瀬と2人、そのおんなじ同級生の中ではですね、8月7日の晩に病院に自警団で当直した50音順で当たった者でございますので。その落下傘で落ちるといのは妙な話だなあと、爆弾が落ちるのにね、何で落下傘で落ちるんだろうかという感じをもったわけでございますけども。

そのときにちょうど南講堂におります時にですね、爆音が聞こえてまいりまして、みんなでこう聞いててですね。「B29みたいだねえ」と言ったら、佐世保にいた1人の川添という同級生でございましたけども、「俺が見てやろう」と言ってですね、窓を開けて見たんです。そのとき見たときにですね、「あっ、落下傘だ」と、言ったらですね、そのときに行動を起こしたのがですね、即、行動を起こしたのが、藤瀬と福井と2人だけでございます。他はみんなぼかんとしたた、ていうのが事実でございますが、全部亡くなりました。その1人の藤瀬という同級生はですね、すぐ机の下にもぐったそうでございます。私自身はもう急いで階段教室を上から下まで走り降りてですね、下でもう耳と鼻をおさえて、目とおさえて伏せたわけでございますけども。それから後はピカもド

ンも何も知らないという状況でございました。おそらく後で話を聞きますと、原爆性の健忘症、何もかも意識喪失だという状態で忘れたんじゃないかと、あまりショックが大きかったんで、そうじゃないかという話でございまして。私はピカもドンも知りません。ただ自分がおりましたところが、もう自分と全然今まで伏せたところと違うところにいたことは確かでございます、おそらくそこまで吹き飛ばされたじゃないかと思っております。その講堂というのは階段教室でございましたけども、おそらく下からブアーと吹き上がったものと、窓から入り込んだ爆風、すごい爆風でございますが。だいたい瞬間風速が200mというような物凄いものでございまして、そのまま南講堂の中というのはちぎれた木片と、コンクリート片とそれから硝子片と、もうとにかく荒れた状態でございます。その中に私は入り込んだわけでございます。どこに入り込んだかというと、その講堂を造ってるですね、コンクリートの土台の枀があるわけですね。土台があります。その枀の中にいたわけなんです。たくさんの枀のなかの一つの中に自分は入り込んでいたというような状態でございます。

まあ不思議なもので、人間というのはですね、必ず生きていられるかどうか確かめるために、体を動かすものでございましてということは、初めてそのとき知ったんですけども。自分で動かしてみたら、あつ体が動くんだ、生きていられる。それなのに目が見えない、何でこんなに真っ暗なんだと、目が飛び出てるんじゃないか、私自身は非常に心配したわけでございます。その目がですね、突然、黒い、真っ黒な状態から真っ赤に見えまして、火事だと思ったんですけども。その後ですね、赤からややオレンジ色に変わって、普通の色に変わるとい、ちょうど虹のように変わるような形で、普通に戻ったんでございます。すごい砂煙とそれから真っ黒な状況でございまして。私どもここがどこだか、何だか、自分が生きてるのか死んでるのか、わからないという状況でございました。

それからやっとその周りを確かめたところが、厚いコンクリートの中だったもので。四角いコン

クリートの中で、どうして自分がこういうところにいるのかと思ったんでございますけども。その南講堂を作っている土台のですね、コンクリートの柁の中へ私が入り込んで、そこの中にたくさん木切れと硝子片とコンクリートとが多くあったわけです。そこから私が出て来たんでございます。やっと出てきたときに、喉がカラカラでですね、もうとても水を飲まないともたまらないという状況でございましたけども。そのときにちょうど、ねじると水道が出てくるようなカランがありまして、そこにちょっと手をやったところが「アツツ」というぐらいに、熱いんですね。それから中から出てきた水というのは熱湯でございまして、バアーと沸騰しているようなものでして、とても飲めるようなものじゃなかったということでございます。

それから私もずっと逃げてきて、逃げた途中の話をする、もうまさにそれは地獄でございました。そこで会いましたのが、私の2年年上の中山先生という先輩でございまして、この人のお父さんは長崎の県の衛生部長、当時衛生部長だったと思いますけども。その方が今現在、岐阜県におられるという話ですけども、はっきり確かめておりません。その方に会いまして、その方に私は「水を飲みたい。さあ、お芋食べたい」それからそこから辺に転がっている物を食べて、なんとか口の中のカサカサしている状態をとりたいたったんですけども。「絶対食べたらいかん。飲んだらいかん」もうそりゃ、激しい言い方をしてですね。私自身はそいじゃ先輩の言うことだから、聞こうと思って、何も食べなかったんです。飲まなかったんです。それが幸いしましてですね、後でそれを飲んだ方、食べた方はですね、全員放射線で腸の方をやられてですね、大変な下痢をしたり、それからすごい、第2期症状という症状なんですけども、それで亡くなられた方が多かったという話でございまして。なぜ私に「食べるな、飲むな」と言ったのか、全然本人もわからないと言うようなことを、後でおっしゃっておられましたけども、そういう状況でございました。そのまま私は帰った

んでございます。

その21世紀まで生き長らえるということとはとても考えられなかったんでございますけども。明日死ぬか、あさって死ぬかという状態に私自身がなるとは、夢にも自分で思わなかったんです。9月5日の日に口をゆすいでたら、大量の出血が口の中からありまして、血がたくさん出たんですね。それでその日から私の病気が始まったわけでございます。すごい状態でございます、もうものの1日か2日の間に熱が37度、8度、9度と出まして、40度近くまで上がりまして、貧血が非常にひどいという状態でございます。これは原爆第3期症状ということでございまして、これはですね、どういうわけで分かったかという、私の同級生が近所にいたんですが、その近所の同級生が、タブロイド版と言って、今の現在の新聞のですね、約半分くらいがタブロイド版と言うんですけども、それがやっと出てるという状態が、その頃の新聞にございまして、その新聞を持って来たんですね。その新聞に書いてあるのですね、「広島に新しく発生した原爆症状は、まず、歯齦から出血して、その後発熱をし、扁桃腺炎の症状を呈し、出血性傾向がある高度の貧血によって、やがて大小不同の皮下出血斑を生じて、遂には死亡するに至る。適切な治療はなくて死者は増加の一方をたどっている」というのが記事の内容でございました。命が救われたという記事は1行もございませんし、「死に至る」「救う方法はない」「死者は増加の一方」という活字だけが私の印象に残った訳でございまして、全く私の症状と同じでございました。これから非常識の世界は、私の運命を左右することになっております。

医師でありました父は、昭和17年に軍医として召集されまして「代診を置くな、病院は閉鎖せろ。薬は全部大きい茶箱に入れて、床下に埋めておけ」と使用命令どおりに母は遵守したわけでございます。私がもう死にかかっている状況を見まして、母がもう気違いのようになりまして「なんとか順に薬品はないだろうか、薬はないだろうか」と。私、すなおと読むんですけども、順と書きますが、

すなおと読むんです。薬はないだろうかと考えた拳句の果てに、父が残っていた薬の茶箱のことを思い出してですね、その茶箱は大きな茶箱なんですけど、中が亜鉛板で貼ってあるんですけど。それを開けてみましたところ、中にですね、リンゲル液、ロック液、ゲドックスという毒消しの薬、ビタミン液、それからサルファ剤に至るまで大小さまざまですね、ブドウ糖液などもありまして、アンプルがぎっしり茶箱の中に宝物のように入ってたんですね。それが私の急場をしのいだ事になっております。

世に言う原爆第3期症状というのは、放射線による致命的なですね、骨髄の造血機能障害でありまして。みなさんご存知のように癌のような幼若性細胞がですね、放射線でかなり死滅させられるところまでいくわけでございますけども。まず先にですね、ガンマ線、中性子というのは、人間の体の幼若な細胞、病気の細胞というものを全部やっつける方向にまわりますので。私の体の中にはですね、成熟した赤血球や白血球はあったけれども、それをあとから支えてくれるですね、予備軍、血液予備軍は全く無かったと。全部消失してしまって血小板も何もなかった。そのために体の中はですね、組織球もなく白血球もなく赤血球もだんだん減ってくる状態。成熟した血球が減ってきますという、自然にそういう状態が強くなるんですが、その後を支えてくれる血液が全然ないんですね。これを『死の谷間』と言いまして、そういう『死の谷間』というものを黒い『死の谷間』というものがあるという状態にだけなりまして、そしてみんな死んでいくわけでございます。

ところが不思議なことにはですね、私の父が出征してて、入院室が空いておりました。入院室が空いて、しかも台所もあり風呂場もあるということですね、近所に大刀洗航空隊というところの燃料タンクがありまして、燃料タンクは林兼が造っていたんですけども。その燃料タンクを接収してですね、持ってたわけ。大刀洗航空隊がそこを守備するのに1中隊、そうですね、70名ぐらいいたでしょうか。そのくらいの人数持って

たわけ。その中に30名近く、私と同じA型の血液をもった若い兵隊達がいわけでございます。それに今度は近所にですね、またこれも不思議なことには、長崎大学の医学部の第二外科、今、兼松学部長がいらっっしゃいますけども。その島内先生というですね、講師の先生が、その川南造船所というところの、特攻のボートを造るところに来ておられまして、その方と、それから私のところのですね、病院の中隊本部に接収した中隊長とがですね、一緒によく会ってお茶を飲んだり何だりしてたんでございます。その婦長さんが、坂本婦長とおっしゃって将来ですね、長崎大学の坂本総婦長になられるお方ございましたんで。その方とお2人がそこで勤務してた状態が近所にあったわけでございます。

その先生の依頼でですね、提言で、私にその若い兵隊達の血液をですね、A型の血液をそのまま入れたらどうかということになりまして。まさに戦争と同じでございまして、静脈から静脈に私の血液の中に若い兵隊さん達のもので、A型の血液が入り込んだわけですが。20数名の若い兵隊達の血液のA型が私の血液の中に入ってくると、そして私の谷間、『黒い谷間』を埋めると、『死の谷間』を埋めるということになりまして。その入ってきたA型の血液によってですね、私が生きることができた。生きて、だんだん自分の体の中で、白血球を造り、赤血球を造ってくるまでの期間の間ですね、その人たちの血液が私の体を支えていたことになってたわけでございます。

もう全く私自身も、体はちょうど三角形のきれを置いてたら、地獄の亡者だと言われているような形になりまして、それでよぼよぼしとったわけなんでございます。寝てばかりでとても意識もなくて、ここがどこだか、夜だか昼だか分からないという状況でございました。私の母が「順さん」と言って私の手を握る。その握られた痛みでやっと目をさますという状態が続きまして、血液をいただきながら、あるいは父が残してくれたアンプルの液を頂きながら、私は生き長らえていたというのが、そのときのことでございまして。そ

れがなければ、私は絶対に死んでたという状態でございます。

つまり症状としましては、重篤な敗血症、それから紫斑病、それから壊血病、スכולブートが一挙に無抵抗な人間、つまり免疫不全の人間を襲ったということになります。もう私の口の中というのは真っ黒になりまして、ノーマと言いますが。水癌のようにですね、爛れてきて歯がぼろぼろ落ちるといって、そしてその骨は死骨になって腐れてですね、骨が残ってきて、そしてその歯だけが上から順々に落ちていくわけでございますが。下の歯も落ちてくる。結局残りましては下の犬歯だけでございます。その他全部落下しましたんで、皆さん方、信じられないかもしれませんが、20歳の状態のうちから全部入れ歯でございます。それで今も上も下もですね、もちろん入れ歯でございます。もう60年間ですね、この入れ歯で過ごしているんですが。それを過ごしているという自身がね、実は体が助かっているということに繋がっている。なぜかという、人一倍噛むんですね。噛むということ自身はね、もう唾液がたくさん出るんで。したがってその唾液が出てくる状態がだんだん続いてですね、例えばですね、ルバング島で助かりました小野田少尉が口のまわりにいっぱいもう唾液が出てきてしょうがないという状態になっているんですけども、それと同じように唾液がいっぱい出てくるんですね。私の体が少しずつそれによって維持されたという状況、人一倍よく噛んだということもですね、長生きの一つのことかもしれません。

結局は白血病も起こらなくて、『死の谷間』を乗り越えて、『死の谷間』というものを若い兵隊さんたちのA型の血液が支えてくれると。そのときにですね、もう考えてみても私不思議でならないのは、あの頃にですね、所謂アンプルというようなリングルとかロックだとかブドウ糖液だとか、そういうなものがビタミン液だとか見たことがないぐらいの状態にして、手に入りません。その上にですね、血液を輸血してもらうなんてことは夢にも考えられない状況でございましたけど

も。それが不思議なことにはそういう状態があって、私が支えられたということでございます。

その上に、そのガソリタンク、つまり燃料タンクを徴用逃れということで、働きに来てくれた方々がですね、長崎の藤村薬品の社長だとか、あるいは、西脇薬品の社長だとか、あるいは伊東薬品の社長さんという方々も卸問屋の方々がですね、全部そこに働きに来てくれて。その方々にですね、中隊長が命令されることによって、手になかなか入らなかった薬品も手に入るといような状況になりまして、少しずつ私の体が助かってきたというようなことになったわけです。そういう状態でございます、この『死の谷間』というものを逃れたということは、幸運の積み重ねだったということでございます。

母が一生懸命になれない手で、私に注射をしてくれたりなんだりしたんでございますけれども。私が口から大量に出血したのが9月の5日。9月の12日に、私の兄がですね、京城の帝大予科、帝大の医学部だったんですが、医学部から帰ってまいりまして、やっこつと母にですね、輸血、その他血液のいろいろな注射してくれるということになりまして。もうそのときのことは一生忘れないと思うんです。

父はそのまま南支の汕頭^{スフトゥ}というところにしまして、そこから広東まで歩いて行軍をして、それから帰って来たのでございます。帰って来た時には私は死んでるものだということを、鹿児島で話を聞いたそのままをですね、私の母に電報を打ちまして、電報に「今浦賀にいる。順のことは諦めた」私のことは諦めている。だから何も弁解するなど、私の母に電報を打ったという状態でありまして。私の母がそれを見て「あっ、順は生きてるのにな」と思ったそうでございます。私が父と会った時にですね、父が私の背中を、瘦せた私の体を抱いて、そして背中をかきむしるように抱いてくれたことは、私が忘れられないひとつの感動的な状況でございました。父が帰ったんでございますが、父も昭和34年には亡くなりました。

それから平成4年には、私は早期肺癌の手術を

受けまして、右肺下葉全部切除致しました。小学校2年生の時には、湿性肋膜炎で胸膜は癒着しておりますし、心臓もそれによって癒着が起っております。それから肺結核を両側、昭和25年、24年でございましたか、両側起こりまして、胸膜が癒着しまして、両側の陳旧性肺結核もありました。穴も空きました。年を取りましたところが、肺繊維症だとか、肺気腫などが再発しまして、とうとう病院の呼吸器の先生の指導でですね、家に帰ったら在宅酸素をするというようなことまでおちいったわけでございますが、まあまあこういうふうにして生きとります。なんとなく私を見た人はですね、丈夫で健康的らしいと。姿勢がよくて何事にも積極性があるように見えるらしくて、若く見える秘訣は何かということをよく訊かれるんですが、私としては申し上げようがないという状態でございます。最近では甲状腺腫のこともあり、満身創痍でございますけど、幸い精神的には認知症もございませんので、現在の状態を過ごしているわけでございます。

しかし原子爆弾というのはですね、最初、私はこだわりをもっておりまして、あの忌まわしいですね、大きな巨大な原子雲の真下に自分はいたせいであったと思います。「原子爆弾が落ちて、昼が夜になり、人はみなお化けになる」というですね、まさに女の子がうたった原子爆弾の後の、原爆詩と申しますけども、ポエムの状況と同じ、「原子爆弾が落ちると、昼が夜になる。人はみな、お化けになる」という状態を通り越してきた私から言いますというと、もうなんとも申し上げようがない。やっと自分がこうして生き残っているのは、考えられないような幸運というものに恵まれてですね、母も父も私自身も救ってくれたんだなあというふうに思っております。みなさまにもほんとに感謝したいと思っているわけでございます。

原爆によって被害を受けてその人は死にましたし、同級生がたくさん亡くなったんでございますけれども、その方々に比較しますと、私は生き長らえてここにいるということ自身が非常に不思議な気がいたしてなりません。死んだ人はものを言

うことができませんし、ものを書くことも出来ませんし、人と人と触れあうこともできませんし、話をするということもできません。なんにもできないわけなんです。しかし、私は何とかできるんですね、80に近いんですけども、今でも月曜と木曜日には患者さんを診たりしておりますけども。まあ、死んだ人は60年後の社会の状態というのも全く知りませんし、私達は毎日テレビで「そうだった、ああだった」ということを知っておりますし、話をすることもできます。生きている者は何かしなくちゃならないというのが私の気持ちでございます。

私は、地球は大変美しい状態、私達地球号というのは大変美しいと、心から愛しております。懸命に生存を続けている地球上の全生物も、愛しいと思っております。だから私は言わねばならないし、この地球を破滅に追いやるような愚かな行為というもの、つまり原子爆弾ですが、それはもう絶対にですね、中止して欲しい、実験も止めて欲しい、持っていることも、保有していることも止めて欲しいと思っております。例え、天命が尽きる、命が尽きる状態があってもですね。その状態のつかの間の命でも大切にしたいと思っているのも、普通の方々、あるいは動物でも植物でも同じでしょうけども、そういうものであろうと私は思っております。ひたすらに生きようとする希望までですね、破滅し奪うような愚かなやり方というのは、是非禁じて欲しいと思っております。核兵器の製造とか実験も絶対に中止して欲しい。それから生命に対して脅威となるようなものはですね、すべてこれはやめて欲しいと思っております。過去というのは変えることができません。過去を変えるというようなことは絶対不可能なんですね。私自身も原爆にかかったってこと自身は過去でございます。不可能でございます。しかし未来は変えることができます。だから同じ過去を繰り返さない、同じ過ちを繰り返さないということだけは、守りたいと思っております。

最後に私また申し上げたいと思いますのは、実は私は先程話がありましたように、長崎大学の医

学部の中にありました附属医学専門部が廃校というように憂き目になりましたので、私自身医者になることも不可能に近い状態でございましたので、長崎大学から東京大学まで参りました。東京大学の方の附属医学専門部に入校したんですね。

そこで初めてですね、東京大学の先生方にもお会いできました。そのときに放射線医学の、しかも病理学の専門でございました三宅仁という、仁は仁義するの仁ですが、三宅仁という教授の方がおられまして、その方が「福井君、ちょっと来たまえ」ということで、私がそこに行ったことがございます。教授室までわざわざ尋ねて行ったんでございます。その先生がですね、もう私の経験をですね、ずっと時間おきに訊いて頂いてびっくりしたんでございます。そして私に骨髄穿刺というか胸骨のところにですね、大きな釘みたいな針を差し込んで、中の骨髄を採って検査するというのをさせてくれないかというようなお話があったんで「どうぞ是非やってください。お願いします」と。ほんとに世界的な権威な方ですから、その方に骨髄穿刺をしていただくということは、有り難いことだと思ひまして、お願いしたわけでございますが。そのときにいらんことを言うたですね、私が。「どうせ長くない体ですから」と、言うことを言っちゃったわけなんです。そしたらその先生がですね、もう顔色を変えてですね、私に「何をおまえは言うのか」と。そういう「長くない、若いうちに死ぬかもしれないと思ってるような者に、何の医学を教える必要があるのか」ということをはっきり申されまして。そして私自身に言われたことはですね、「医者というのはなるべく長生きをして、たくさんの患者さんを診て、それから世の中のために人のために尽くすだけ尽くして、そして仕事をもっているのが医者なのに、おまえのようにどうせ長くはないと思ってるような医者には、何を医学を教える必要があるのか」ということを言われまして。「明日退学届を持って、事務のところにやって来い」と言われたぐらいでございます。もうびっくりしまして。私自身もですね、ほんとにそうだと、若くてどうせ長くない

と思っている状態の者が医学を教えてもらっても仕方がない。やっぱり医学を習った以上はですね、なんとか頑張って長生きをしなくちゃいかんという気持ちに、切り替わったわけでございます。不思議なことにそれまでたくさん病気をしていた私でございますね、病気をしない状況になってきたのでございます。

それから私自身は骨髄穿刺をしてもらったんです。そうしたところが、先生がおっしゃるにはですね、私に「一週間後に来い」と言われまして、行きましたところが、しかられるだろうと思って行ったんでございます。そこで何と言われたかと言うとですね、「あなたの骨髄は立派に再生している」「だから頑張る。今からでも遅くない」と。「あのときあなたは19歳。満の19歳で、殆ど20歳に近かったと。だから40歳になったら20歳になったと思いなさい」と。「60歳になったら40歳になったと思いなさい」と。「なぜかと言ったら、あなたの病気に、将来病気になるような細胞だとか、癌になるような細胞というのは、もう現在もう殆ど死んでるんだ。だからあなたの体は生まれ変わったんだ」と。「だから生まれ変わったと思え」というようなことを言っていた。私に盛んにその「医者になって一生懸命勉強しろ」ということを言われたことを、まだここで思い出すわけでございます。

その甲斐がありまして、私自身がそこを卒業しましたときに、南原繁という立派な白髪の総長がいられたわけですが、その方から卒業証書を直接に頂くということもできました。それを見に、わざわざ、私の父が、私を抱いてくれた父がですね、東京まで来てくれたんで。もう私、安田講堂で頂くときにほんとに嬉しいと思ひましたし、将来医者になって頑張るぞと、ほんと心の中で叫んだわけでございます。

そのとおり、現在までこういうふうに生きているわけでございますが、そろそろ死期も近まってきました。大変な状況でございますけれども、皆さんのお力を得て、できるだけ頑張るってですね、今後も生きていって、一人でも多くの患者さんを

診て、死にたいなあと考えております。もうそう長くはございませんけど、この世におさらばするわけでございます。皆様方のような若いお医者さんを見ますというと、嬉しくて嬉しくてしょうがない気持ちがいっぱいでございます。どうか皆さん方は、元気で健康でお過ごしになられまして、今後も医学に励んでいただいて、たくさんの方々を救っていただきたいということで、私の話を終わりたいと思います。どうも皆さん方、有り難うございました。

ふくい すなお
福井 順氏 プロフィール

1926年（大正15年）10月26日生まれ 79歳 長崎県出身

1951年（昭和26年） 東京大学附属医学専門部卒業

1953年（昭和28年）～現在 福井病院（現 長崎記念病院）
長崎記念病院院長、理事長、顧問

【社会活動】

長崎県医師会常任理事、日本病院会常任理事

長崎水産高校校医、長崎県保健医療対策協議会委員

長崎県医療審議会委員、長崎県選挙管理委員長

国際ロータリー第2740地区 2001年～2002年度ガバナー

【受賞歴】

1989年（平成元年） 県知事表彰

1991年（平成3年） 厚生大臣表彰

1992年（平成4年） 日本医師会優功賞

2001年（平成13年） 勲四等瑞宝章叙勲